行程

母の後ろをついてゆく幼児
ずっと砂浜は続いている

やわらかい波が岸をなぞる
ふたりともリュックを背負っている

乾いた事実と
湿った時間と

切り拓かれてゆくものは何もない
生を享けたことそのものを受け入れること

波の泡が薄紅色の貝を運ぶ
ふたりの足元で渦巻く砂とともに

巡礼に似た暮らしが静かに営まれている
共同体という名の呪縛の隙間を縫うように

いくばくかの人々の記憶の片隅に残り
そして何時しか忘れ去られてゆく———

顧みられることを拒むこと
留まる事を拒むこと

何一つ与えることなく
何一つ与えられることはない

波は静かな音を重ねている
その二人を透き通らせるかのように

母が振り向き、幼児がひたと視線を注ぐ———
その交感に込められたもの

ただ私だけがそれを知っている
ひとつの骨片とともに

(2011.9.28)